

R18
ADULT ONLY
成人向け

異世界転生

いせかい
てんせい

恋愛奇譚

れんあいきたん

著：相山タツヤ
絵：懐良匠

Episode:

その淫魔は
雨と共に



ディープな最新作配信中！

R18
ADULT ONLY
成人向け

家に帰ると、
ヤンデレメイドが
甘やかしてくれる。

異世界転移ファンタジー
R18純愛ノベル

生き疲れ社畜と 異世界メイド

「私が一生、ご主人様のご面倒を見てあげますから。
ずうっと、ずうっと……一緒ですよ？」

僕の初恋の相手は、
蜘蛛女だった。

くもおんな

蜘蛛女の 楽園

著 相山ケンヤ

「早く逃げた方が良くないじゃないかしら……？
悪い蜘蛛が、ボウヤを美味しく食べちゃうかもしれないわよ？」

異世界転移ファンタジー
R18純愛ノベル

R18
ADULT ONLY
成人向け

異世界転移恋愛奇譚シリーズ発売中作品紹介

現実社会は辛い事ばかりだから、異世界の少女と幸せになろう。



ヒロイン：
エイリス

「ブラック社畜と赤ずきん」

クーデレ少女に尽くされたい。

主人公の部屋に突然現れた赤ずきんの少女エイリスとの交流と愛情を描く第一作。ブラック企業勤めで毎日が辛い主人公が、クーデレ気味に尽くしてくれるエイリスとの交流と献身的なHによって、徐々に強い自我を取り戻していく物語が見所です。



睡眠姦/布団で初H/夜の電車でH
お風呂で貪欲フェラ/甘々ご奉仕H



ヒロイン：
メリル

「ゆるふわメイドと機関銃」

ゆるふわ天然メイドに癒されたい。

夜道で拾った異世界メイドとの交流を描くドタバタラブコメディ風の第二作。異世界でクビになったロリ巨乳メイドが、主人公の為に何とか役に立とうと大奮闘。人それぞれで良いじゃないとお互い慰め合いラブラブエッチに過ごすふんわり物語。



無邪気に手コキ/ご奉仕フェラ
ラブラブ初H/朝だけど二回戦



ヒロイン：
エイカ

「その淫魔は雨と共に」

エロいメンヘラと共依存したい。

雨が降りしきる夜の公園で出会った、妖しい黒ずきん少女との危険な愛欲を描く第三作。童貞で孤独な主人公がメンヘラ淫魔少女と流されるままに性交し、それから彼女なしでは生きられないと強い愛着を抱いていく共依存溺愛ダークラブストーリー。純愛です。



雨濡れ騎乗位で童貞喪失/甘々授乳手コキ
貪欲肉食エッチ/お尻で初エッチ



ヒロイン:
ローヤ

「吸血メイドのご奉仕生活」

高雅な吸血鬼メイドと夜通しHしたい。
夜道で助けた美女は異世界のメイドで吸血鬼
でしたという第四作。

出会いの場面が済んでからは、ひたすら攻守
交代しつつ夜通しセックスしっぱなしのエロ
さ大濃縮作品になっています。オススメ。

初めての吸精フェラ/ラブラブ中出し初H
♡ パイズリご奉仕/騎乗位攻H/反撃種付プレス
気絶するまで絡み合い/朝勃ち性処理セックス



ヒロイン:
シュノリュース

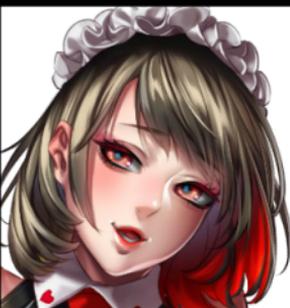
「蜘蛛女の楽園」

青肌人外蜘蛛女とおねショタしたい。
異世界に飛ばされたショタ少年と、青肌蜘蛛
お姉さんとの恋愛模様を描く異色の第五作。

主人公とヒロイン以外は敵だらけ、多くの
苦難が立ちはだかる中で、異種族ながらも
強く想い合う二人の純情ラブストーリー。

でも、エッチはものすごく肉食系。

♡ キスしながら優しく手コキ/
あまあま授乳手コキ/搾精孕ませ交尾



ヒロイン:
アヤカ

「生き疲れ社畜と異世界メイド」

Hなメイドに毎日甘やかされたい。
生き疲れた社畜童貞主人公がひたすら異世界
メイドに重めの愛で甘やかされる第六作。

突然始まる甘々メイドライフ、そして徐々に
明るみになる重い愛に溺れていく純愛作品。
Hシーンもたっぷり特濃です(当社比)

♡ ご奉仕中出しH/夜通し種付けH/おはようフェラ
帰宅後速攻で発情H/バックで激しくケモノH
汗だくお尻で騎乗位H/あまあまパイズリ

目次

- 第一章『その淫魔は雨と共に』 ……8
- 第二章『雨濡れのラブ・ストーリー』 ……27
- 第三章『ペイントイット・ブラック』 ……50
- 第四章『もう一つのヴァージン』 ……66
- 第五章『セカンドライフ』 ……99
- あとがき ……112

●『俺』

本作の主人公。とある有名企業の平社員。

ブラックな職場で心身を消耗しながら、孤独な毎日を送っている。

雨が降りしきる夜に、異世界の少女エイカと出会い、その運命は大きく動き出す。

●エイカ

本作のヒロイン。ある事情により、この世界に転移してくる。

幸せになる自身の姿が最も大好きな、端的に言えば『メンヘラ』の少女。

自分が好かれるためなら手段を選ばず、倫理観を大きく欠いた行動も辞さない。

また、物事が自分の思い通りに運ばないと、破滅的な思考へと豹変することもある。

● X2ダートピストル

薬液を封入した専用の注射器を発射可能な、いわゆる麻酔銃。

火薬を使用せず、圧縮した二酸化炭素を動力に発砲するため、銃声は極めて小さい。猛獣の鎮圧が主用途となっており、人間に使用する武器ではない。

たとえ非致死性の麻酔薬だとしても、専門知識を持たない人間が扱えば、対象に深刻な後遺症を与えてしまったり、最悪の場合は死に至らしめてしまう可能性がある。

第一章『その淫魔は雨と共に』

——雨の日には、必ず悪い事が起こる。いつも、そうだ。

冷たい雨が降りしきる住宅街の夜道を、俺は貧弱なビニール傘を差しながら力なく歩いていた。

「……あそこまで言わなくていいじゃねえか、あのクソ係長……」

孤独で吐き処のない苛立ちがあふれ、自然と独り言が出てきてしまう。

会社で上司から理不尽な叱責を受けるのははや日常だが、今日は輪に掛けてその

程度が著しい。

今日は、主任の指示通りに資料を作成し、係長に提出したところ、要望していた内容と違っていると叱責を受けた。おまけに指示をした当人である主任は、俺の独断行動によるミスだと責任を押しつけて逃れ、係長も係長で仲の良い主任の言葉を丸っきり信じ、俺がいくら正確な経緯を説明しようとも「言い訳するな!」の一言で封殺しに掛かってきた。そして俺は、例の如くタイムカードを切ってからのサービス残業を強いられる羽目になり、今日も終電での帰宅となった。

「こんな生活、あと何十年続くんだよ……ちくしょう……」

とにかく平均寿命だけは長くなり続ける人生百年時代、大多数を占める年功序列の企業では、席数が限られた上位のポストに就く老人たちがそこに居座り続ける限り、下層の若手にチャンスが回ってくることはいつまで経っても無い。

俺から言わせてみれば、全員が全員そうだと括るつもりはないが、バブルで好景気に恵まれただけの苦労を知らない人間たちが、いつまでも今の世の中を支配している

のは理不尽極まりない。

力のない現状の俺が上司にできる唯一の抵抗として思いつくのは転職だが、現実問題として、生活費の収入源が消し飛ぶという大きすぎるリスクがある。最近、ようやく少しばかりの昇給があったが、怒り任せに退職してしまえばそれも全て水泡に帰すことになる。

現状に不満がある人間に向けて、明るい転職を促す広告が何処でもよく目につくが、実際には転職後の給与も上がらない人間の方が大半だ。全てがリセットされるぶん、不都合の方が遥かに多いが、そんな苦しい現実は、いつも誇張された明るい広告群によって覆い隠されてしまう。

つまるところ、俺はこの現実を黙って耐え続ける以外にない。

「はあ……生きるのって、こんなに辛かったか……?」

まだ何も現実を知らなかった幼い頃は、いろいろな希望に満ちていた事を思い返す。

華やかにテレビに映る人間たちのように、俺も面白い仕事に就いて、気の合う異性を見つけて、自分の一軒家と自動車を持って、家族で老いるまで暮らしていけるものだと思っていた。けれど、そんなテレビで映る『日常』も、今の俺にとっては遠い遠い夢でしかない。

現実が、こんなにも孤独で、先行きの見えない暗い旅路だとは思っていなかった。

俺の心境に呼応したように、降り続ける雨はよりいっそう強まっていく。

そこで風が吹いて、雨が横薙ぎに俺の全身を殴りつけて、ビニール傘が裏返った。

「最悪だ……！ クソッ……！」

雨に濡れながら、どうにか骨が崩れたビニール傘を精一杯に整え直す。

「……早く帰ろう。ろくな事にならない……」

だが、そこで人の気配を感じた俺は、踏み出そうとした足を止め、児童公園の方へと視線を送った。

周辺の街灯はまばらで、公園も例外なくほとんど夜闇に包まれている。

「……え？」

ブランコに、黒い人影が座っていた。

街灯の細い灯りを背にしており、逆光でその全身は影に覆われ、まるで亡霊のように視界の中に浮かび上がっている。

風に煽られて、ブランコが黒い影と共にゆらゆらと揺れた。

その時、巨大な雷が空で閃いて、ほんの一瞬だけこの夜闇を白い光で暴き出した。光を浴びた黒い影が見せたのは、笑みを浮かべた少女の顔。

俺は戦慄し、息を呑んだ。

風で再び傘が崩れてしまいが、俺の意識はその黒い少女にすっかり奪われてしまった。

幽霊。悪魔。死神。あらゆる想像が一度に浮かび、頭の中で渦巻いて、粉々に砕けて混ざりあっていく。

「——ねえ、おにいさん……?」

雨風に晒される中、再び暗い影となった少女の声は、俺の耳に鮮明に届いた。囁くような声だが、肌をゆっくりと撫でつけるような、妖しい官能的な響きがある。

緊張していた所で、爆撃のような太い雷鳴が轟き、俺は飛び上がってひどく肝を冷やした。

しかし黒い少女は一切動揺することなく、ブランコをゆったりと揺らし続ける。

「……わたし、行くところが無いの」

言いながら、黒い影はブランコを降りて、俺の元に静かに歩み寄ってくる。

立ち尽くしていると、一際強い突風が吹いて、持っていたビニール傘が壊れて吹っ飛ばされた。

暗闇の向こうへと容赦なく攫われていく傘を失望の眼差しで見送り、それから視線を戻すと、黒い影は俺のすぐ目の前に立っていた。

「おにいさん……わたしを、誘拐してくれる？」

再び大きな雷が落ちて、黒い少女の姿を白く照らし上げた。

雨に濡れた妖しい笑顔が、俺を見つめていた。

俺が動揺で言葉を詰まらせていると、黒い少女は答えを待たずに寄り添ってきて、俺の右腕に手を回した。

「行こう？ おにいさんの家、連れてって……ね？」

猫のような蒼い大きな瞳が、俺を見上げた。

それから俺は、少女を冷たい雨の中で放っておくことも出来ず、なし崩し的に家まで連れていくことにした。

傘が壊れてしまい二人揃って雨ざらしの状態だったが、取りついてくる少女に歩調を合わせるため、ゆっくりと歩かざるを得なかった。

「君は……誰だ？ ひょっとして、家出したのか……？」

歩きながら、ようやく俺はそう切り出した。

「わたしは、エイカ……。家出とは違うけど……。似たような、ものかな」

街灯によって、その黒い少女ことエイカの姿が鮮明に照らし上げられた。

エイカは、犬耳のような飾り物がついた黒いフード付きのマントを羽織っており、その内側には、まるで踊り子のように露出が多い妖美な格好が見えている。

ふくよかな胸の谷間、なだらかな腹部、そしてムチツとした肉つきのいい太ももがさらけ出されており、今や雨によってしっとりと濡れ、言いようのない妖艶さを醸し出している。

マントで隠れた彼女の後ろ腰に、ベルトで取り付けられた大きい何か下がっているが、それはバッグだと思えば俺は気にしないことにした。

「……おにいさん、わたしのカラダに、興味しんしんだね……。？」

「そっ、そんなことない……!!」

慌てて視線を逸らすのが、エイカは俺の胸元を人差し指でツンツンとつついてくる。

「男の子がドコを見ているかなんて、女の子には丸わかりなんだよ……? おにいさんも、いっつも女の子の胸ばかり見てるでしょ……?」

「そんなつもり無いって……!! 第一、そんな露出した過激な格好しておいて……」

弾みで言いかけて、俺はグッと言葉を押しとどめた。これでは、痴漢を正当化する男と同じ理屈を振りかざしているだけだ。

「……ううん、わたしは、おにいさんを責めるつもりはないよ……? こういう格好、男の子は好きでしょ……?」

俺は何も答えない。

「いいよ。おにいさんも、いろいろ、期待してるんでしょ……？ わたしも、優しいおにいさんの事が、好きだから」

エイカは甘えるように、俺の腕によりいっそう強くしがみついてきた。柔らかい胸が、ぎゅっと押しつけられてくる。

彼女に下心を全く感じないと言えば嘘になるが、俺の思考の半分は、彼女の行動への疑問で占められていた。

「……あの……エイカは、いつつも、こんなことをしてるのか？」

「んー……？」

エイカは少し返答を濁して考え込んだ後、言った。

「こっちに來てからは、おにいさんが、初めてだよ……」

「そうか。『こっち』……ね……」

俺は、エイカが別の街でも同じように男を誘惑しているに違いないと解釈した。見知らぬ男に対してあまりにも親密に近寄ってくる彼女の性質や、男を露骨に誘惑するような扇情的な格好からも、それは容易に想像がつく。

女性がそんな行動を取る理由は、俺が考えうる限り、一つだけだ。

「……言っておくが、俺は、金はろくに持ってない。貯金はほとんどないし、家にも金目の物はほぼ無い……。俺から金をふんだくろうと思ってるなら、別の奴にしておいた方が良くぞ。俺は、貧乏人だ」

エイカの企みを戒めるつもりで、俺はあえて強めに言った。

するとエイカは、少しの沈黙を挟んだ後、猫撫で声で答える。

「わたしは……お金になんて興味ないよ……。もちろん、プレゼントとかくれたら、すごく嬉しいけどね？ でも、わたしは、優しくされるのが一番好きなの……」

「……………演技が上手いな」

日常へのストレスから、俺はつい冷酷な口調になってしまう。今やエイカに抱いている感情は、こんな貧乏の俺ですら騙し何かを奪おうとしているであろう悪巧みに対する、静かな怒りだ。

「俺を煽って直接搾取しようとしてるのか、それとも暴行されたと架空の罪をでっち上げて脅すつもりかは知らないが、どちらにせよ、やめておけ。俺は、何にも持っていない。やるなら、もっと上の、腐った金持ち連中を狙えよ」

俺は、彼女に人道を教えて更生を促すような聖人の胆力は持っていない。少なくとも俺自身が親と教師たちに教わった正しい道を信じて歩んできた結果が、従順な奴隷として上流階級に使い捨てにされる今の俺であるからだ。

エイカはエイカなりに、自分が生存していく道を模索しているのである。倫理に反するとはいえ、綺麗事だけでは自我を持って生き抜けないこの社会、俺は彼女の動機に一定の理解はしている。

「寢床に困ってるなら、この一晚くらいは俺の部屋と風呂を使っていい。俺が出来るのは、それくらいだ。明日になったら、別の所に行ってくれ。傘も一本くらいならやるよ」
そう畳みかけると、エイカは俺の腕に取りついたまま急に立ち止まった。

「……わたしが、嫌いな……?」

俯いたエイカは、細い声で尋ねた。

「おにいさん……わたしが、嫌い……？　わたし、何かダメなこと、したの……？」

「え……？　あ……いや……」

気まぎくなくなった俺は歩き出そうとするが、俯き続けるエイカはまるで地面に深く打たれた杭のように微動だにしない。

「あの、つまり……俺には、君の願っているような財力は皆無ってことだ……。誘惑されたって脅迫されたって、金なんてろくに出てこない」

「わたしは、お金なんて要らないよ……？　ただ、優しくされたいの……。おにいさんは、私が嫌いな……？」

腕に取りついた彼女の力が、次第に強まってくる。次第に恐ろしくなってきた、そ

れを振り払おうとするが、彼女の手は決して俺を逃さない。

「わたし、おにいさんの為なら、何でもしてあげるよ……？　それでも、嫌いな……？　見捨てるの？　わたしが、嫌なの？　嫌いな？　殺したいほど、嫌い？　憎たらしい？　殺したい？　憎い？　殺す？」

口調が急速に早まってきたと思った所で、エイカが俯いていた顔を上げた。

その瞳は、真っ赤な血の色に染まっていた。

戦慄した俺の悲鳴は、声にならない。

エイカがおもむろに自分の後ろ腰に回した片手を、俺の眼前まで持ち上げた。信じられないことに、そこには大型の拳銃が握られていた。

冷たい金属の先端が、俺のあごの下にガチリと強く突きつけられる。

「ねえ、答えて……おにいさん。わたしのこと、嫌い？　なにか悪い事、した？　わた

しを殴りたい？ 首絞めたい？ 殺したい？ 早く教えて、おにいさん。わたし、悲しい。すごく悲しいの。おにいさんに、嫌われたくないの。好かれないうと、いやなの。そうじゃないと、全部、消しちゃいたくなるの。おにいさんを無かったことにしないと、わたしは苦しくて、死んじゃうの。ねえ、答えて。答えてよ。ねえ」

真っ赤な瞳に見つめられ、俺は恐怖に震えながら、命からがら声を絞り上げる。

「好き……好きだ。エイカの事は、好きだ。嫌いなんじゃない、好きだ。大好きだ」
人生初の異性への告白がこんな形になるとは夢にも思わない。俺はとにかく助かりたい一心で、言葉を繋げる。

「さっきは疑ってごめん。本当にごめん。俺は女性に好かれたことも無いから、疑いが先に出た。そんな性格なんだ。本当にごめん。本心で言えば、エイカは魅力的だと思うし、恋人にしたいと思う。可愛いし、好きだ。うん、本当に好きだ……」

偽りの言葉が次々と口から出てきて、自己嫌悪に陥ってくる。これも、サラリーマンとして身に着けた処世術の賜物なのか。

とにかく、俺の言葉はエイカが求める最適解だったようで、彼女の瞳からとたんに赤色が引いていき、もとの蒼い色の瞳に戻っていった。

……人間じゃない。

エイカは拳銃を降ろし、無邪気な笑みで俺を見つめた。

「本当……？ うれしい、うれしいな……。わたしも、おにisanのこと、もっと好きになっちゃった。おにisanって、素直じゃないんだね……？ それもかわいいけど、わたしの前では、正直でいいからね？ 隠し事なんて、しないでね……。？ 約束だよ……。？」

すっかり全身が雨でずぶ濡れになった俺は、生きた心地がしないまま、おずおずと頷いた。

雨の日には、必ず悪い事が起こる。いつも、そうだ。

今日、俺は魔物を拾ってしまった。形容するなら、『淫魔』。

淫魔は、獲物となる男性の最も理想とする魅惑的な姿で現れ、精と共に魂を奪い喰らっていく。

そして、美しい外面を剥がした正体は、醜悪で貪欲な怪物であると云われている。

第二章『雨濡れのラブ・ストーリー』

俺は心中穏やかでないまま、ぴったりと寄り添い続けるエイカを伴ってマンションの自宅に到着した。

「んん……おにいさんの匂いでいっぱい……おにいさんは、独り暮らし……？」

「……ああ、そうだ」

「そっかぁ……」

エイカが妙な笑みを浮かべ、ようやく俺から身を離した。

一刻も早く濡れた服を着替えたかった俺は、玄関で手早く不快に濡れた靴を脱いで、ワンルームの自室に早足で上がった。特に趣味らしい趣味もない俺の部屋は殺風景そのもので、部屋にある家具も最低限にまとまっている。

ずぶ濡れのスーツをハンガーに掛け、ネクタイを鬱陶しげに解いてベッドに投げ捨てて振り返った所で、エイカが急に正面から俺に抱きついてきた。

「おっ、おい……」

身体に、エイカの大きい胸がぎゅっと押し当たってきて、濡れた彼女の感触が染み込むように伝わってくる。

俺はやっぱりと身体を離そうとするが、彼女はその腕を頑なに離そうとしない。

「ねえ……おにいさん……」

エイカは誘うような瞳で肉感的な桜色の唇を動かし、そのまま、静かにキスをしてきた。

柔らかいがひんやりとした彼女の唇が、俺の口に、ちゅっ……と吸いついてくる。

人生で初めてのキスだが、今は嬉しさよりも困惑の方が大きい。俺は抵抗することもできず、されるがままに立ち尽くしていた。

すると今度はエイカが舌を出して、俺の唇をぺろ……と舐めてきた。

「……おにいさん……ひょっとして、キスも、はじめて……？」

挑発的に見つめられ、俺は素直に頷くしかない。

「そっかぁ……わたしが、おにいさんの、はじめての女になるんだね……？ うれしいなぁ……」

エイカは舌なめずりをすると、再び唇を合わせてきて、同時に強く俺の身体を押し
てきた。

「わっ……!!」

俺はそのままベッドに思い切り押し倒される格好になった。
エイカは濡れた身体で、そのまま俺に馬乗りになってくる。

「な、何を……」

「心配しないで、おにいさん……気持ちよくなるだけだから……ね？」

まさか彼女は、いきなり俺を犯す気か。

「やっ、やめろ……！ 俺は、そんなつもりじゃ……」

「おにいさん……わたしの前では、素直になっていいんだよ？ おにいさんの、『ここ』は、嫌じゃないみたいだよ……？」

エイカは妖艶に笑い、生理現象で固くなった俺の股間を手で優しく触った。

「おにいさんの、おちんちん……もう、かたくて、あつい……。手が、溶けちゃいそう……」

「本当に……やめてくれ……！ これ以上は……！」

「……おにいさん？ やっぱり……わたしの事が、嫌いなのか？」

急にエイカは真顔になって俺を見下ろした。股間を握る彼女の手には、グッと力が込

められる。

このまま握り潰されかねないほど恐ろしい気迫を感じ、俺は反射的に弁明する。

「……きつ、嫌いじゃない！ す、好きだ！ けど、こういうのは、やっぱり順を踏んでいかないと……こんな展開、早すぎる……」

「わたしがしたいから、こうしてるんだよ……？ おにいさんも、きつと、気持ち良くなってくれる……だから、安心してね……？」

言葉が通じているのか通じていないのかもはや分らないが、とにかくエイカはこの行動を止めるつもりは無いらしい。

俺は童貞だが、こんな形で初めてを捨ててしまうのはどうにも不本意に感じる。

そんな心境を察してか、エイカはクスクスと笑い、俺の股間を優しく弄りながら言う。

「ねえ、おにいさん……？ おにいさんが理想に思ってるような綺麗な女の子は、みんな、肉食な男の子たちに食べられちゃってるんだよ？ おにいさんが平和ぶって黙って座ってる間に、押しが強い男の子はどんどん好みの女の子を見つけて犯しちゃうの。おにいさんの初恋の子だって、今ごろはおにいさんより格好いい彼氏とラブラブえっちして喜んでると思うよ。世界って、そんなものなんだよ……？」

心に黒い刃がグサリと突き刺さって、俺は力無くうなだれる。

俺にはもともと、保育園からの付き合いだった仲のいい幼馴染の子がいた。しかし良好な関係を保ち続けるため一線を越えようとしなかった結果、彼女は中学生の時に同じ部活の先輩の恋人になってしまった。それは、彼女が部活動を始めてから、たった三ヶ月余りでの出来事であった。

それから俺は黙って毎日のように破局を願い続けたものだが、膨らんでいく嫉妬とは裏腹に、日を追うごとに二人はどんどん親密になっていく。やがて俺は、いつまでも彼女の不幸を願い続ける自分自身に嫌気が差すようになり、幼馴染としての付き合い合

いを自ら断ち切った。

それは今でも、俺の大きなトラウマとなっている。

「大丈夫だよ、おにいさん……？　これからは、わたしと、おにいさんが、そーんな昔の女なんて忘れちゃうくらい、たくさんラブラブえっちするの。一緒に、幸せになるう、ね……？　わたし、ずっと、おにいさんと一緒に居てあげるからね……？」

エイカは俺の右手をとって、ぎゅっと握った。

俺は妙な心境に陥った。形はどうであれ、俺の暗い孤独を埋めようとしてくれる彼女に、少しでも好意を抱きつつある。

このまま雰囲気の流れがいいのかは分からないが、少なくとも、彼女を強く突き飛ばして拒絶しようという気持ちは起こらない。

「落ち着いた……？　おにいさん……わたしも、すごく、寂しいの。おにいさんが欲し

くて、がまんできない……。優しくして、あったかいの、ほしいよ……」

頬を少し紅潮させたエイカは、握ったままの俺の手を、自分のミニスカートの内側へと導いた。

指先が、彼女の冷たく湿った布をずらして、その奥にある秘所に触れた。ぬちゅり、と水音がして、彼女の濡れた膣へと指が沈み込んでいく。

……これが、女性の、中……。

エイカの体内は、雨に濡れた彼女の素肌と同じくらい、ひんやりしていて体温を感じない。

それでも、俺の指の動きに合わせて、愛液でぬめりけのある彼女の肉ヒダがうごめいて、何とも言い表せない官能的な心地で満たされた。

理性や恐怖がボロボロと崩れていき、今や俺の思考はエイカのこと一杯になってしまう。

俺のペニスは、彼女を求めてさらに鋭く勃起し始めていた。

「ふふっ……おにいさんったらノリノリ……。もう、入れちゃうね……。？ おにいさんも、苦しいでしょ……。？」

エイカは息を荒くして、俺のスボンのベルトを解いてトランクスもろとも一気にずり降ろした。

屹立した俺の陰茎が晒され、エイカはそれを愛おしく見つめながらスカートを脱ぎ、慣れた腰つきでその上にまたがった。

亀頭が、薄い陰毛が生えた彼女の膣口に触れて、くちゅ……と卑猥な音を立てる。

「待って……。俺、ゴム、持っていないよ……。」

「いいよ、いらない……。生がいい……。わたしのナカに、直接出して。おにいさんが欲

しくて、たまらないの」

試読版は以上です。続きは本編で！

ガンスミス・アイヤマ

